

IV ま と め

1. これまでの中務省の調査について

中務省に関係するこれまでの主要な調査は今回調査分を含め17箇所（表1・図9参照）におよんでいる。平安宮の他の官衙にくらべ調査数、検出遺構数とも多く、小規模調査を積み重ねることにより徐々にではあるが調査成果を得つつある。特に現在の丸太町通に面する一帯は、中務省の北半部にあたり、内舎人・監物などが位置していた。以下にこれまでの報告書からその成果を要約するが、検出した遺構は平安時代前期・中期を中心に複雑に重複しており、各時期を整理するまでにはいたっていない。

中務省の規模 中務省の範囲については、調査地16で中務省北西隅を検出し北限および西限を決めることができた。これによると、北限は中御門大路南築地の延長線上に位置していることが実証できた。

このことから東限築地の検出例はないが、中務省東限は壬生大路西築地の延長と想定できる。したがって検出した西限築地との寸尺関係で中務省の東西幅は築地心々で57丈（約170.4m）を得ることができた。

南限については明確な検出例はないが、手がかりとして昭和63年度に実施した太政官北限の調査（注10）で太政官の南北幅が40丈であること、中務省南限築地との丈数が4丈以上あること、さらに中務省南限に関係するとみられる東西方向に走る溝跡の検出などから太政官と中務省との間は7丈と推定するにいたった。その結果、中務省の南北幅は現段階では37丈と考えるのが最も妥当であろう。

中務省の区画 中務省の中を区画する遺構には、北限に接する位置で実施した各調査地で築地内溝を検出した。また、内部を南北・東西に区画する築地や溝を検出している。

調査地11と調査地13の2箇所でも南北に通る築地を検出した。調査地11のものは中務省の東西幅57丈を西に40丈、東に17丈に区画する位置にあたる。調査地13のものは、前述の40

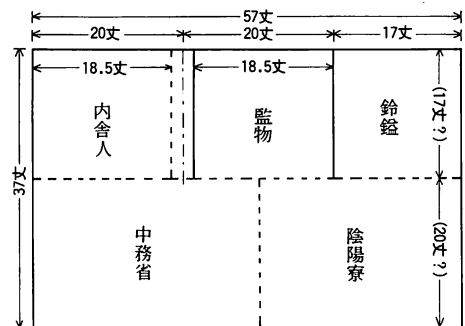


図7 中務省復原図

丈を2分する中心線上に幅3丈の小路を想定したとき東側築地の位置となる。

調査地2・9・12・8では東西方向に通る一連の溝を検出した。この溝の北側に東西方向の築地を想定することで、南北幅37丈の中務省を北に17丈、南に20丈に分けることができることになる。

以上の関係を整理すると図7の配置関係を想定することができる。この関係は平安宮古図の中にも近似したものがある(注11)。もちろん最初に述べたように、時期的な区画の変更や変遷が未整理であるため、推測の域をでない概略図であること

を述べておきたい。この関係を裏付けるものとして、調査地5で出土した「内舎人」および今回の調査地で出土した「監(物)」の2点の墨書土器があり、付近にこれらの曹司が位置したことにはまちがいないであろう。

建物跡 今回の調査成果で掘立柱建物を1棟復原できた。この建物は前期に建てられ中期には基壇をもつ瓦葺の礎石建物に建て替えられている(図8)。

掘立柱建物の規模は東西棟で身舎桁行7間、梁間2間で南に廂が付く。桁行は2.7m、梁間は2.4m、廂3.3mに復原できる。この建物と同じ規模とみられる掘立柱建物を調査地11でも西妻の部分のみではあるが検出している。北限から同じような位置に建てられ、規模からしてもまた区画の中の位置関係からみても各曹司の中心的な建物と推測される。

礎石建物はすでに既往の調査で復原できており、今回の調査では2箇所礎石据え付け穴の痕跡を検出した。東西棟で桁行5間、梁間2間であることがわかる。柱間は桁・梁とも3.3mを測る。基壇は調査地4で確認したが、他の調査地では削平を受け明確ではない。周辺には瓦の堆積が各所でみられ瓦葺の建物とわかる。この建物は若干東に振れるようで、調査地13の築地も同じような傾きをもつようで、今後の調査成果と合わせ時期を含めて検討していく必要があらう。

2. 小 結

今回の調査では、中務省関連の遺構として新旧2時期の遺構を検出した。これは従来の附近の調査と一致する。特記すべきことは、今回の調査で平安宮造営当初の中務省北辺の

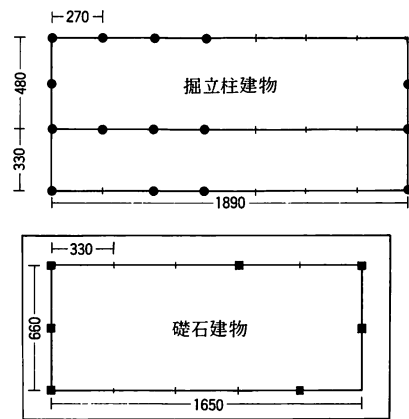


図8 建物復原図

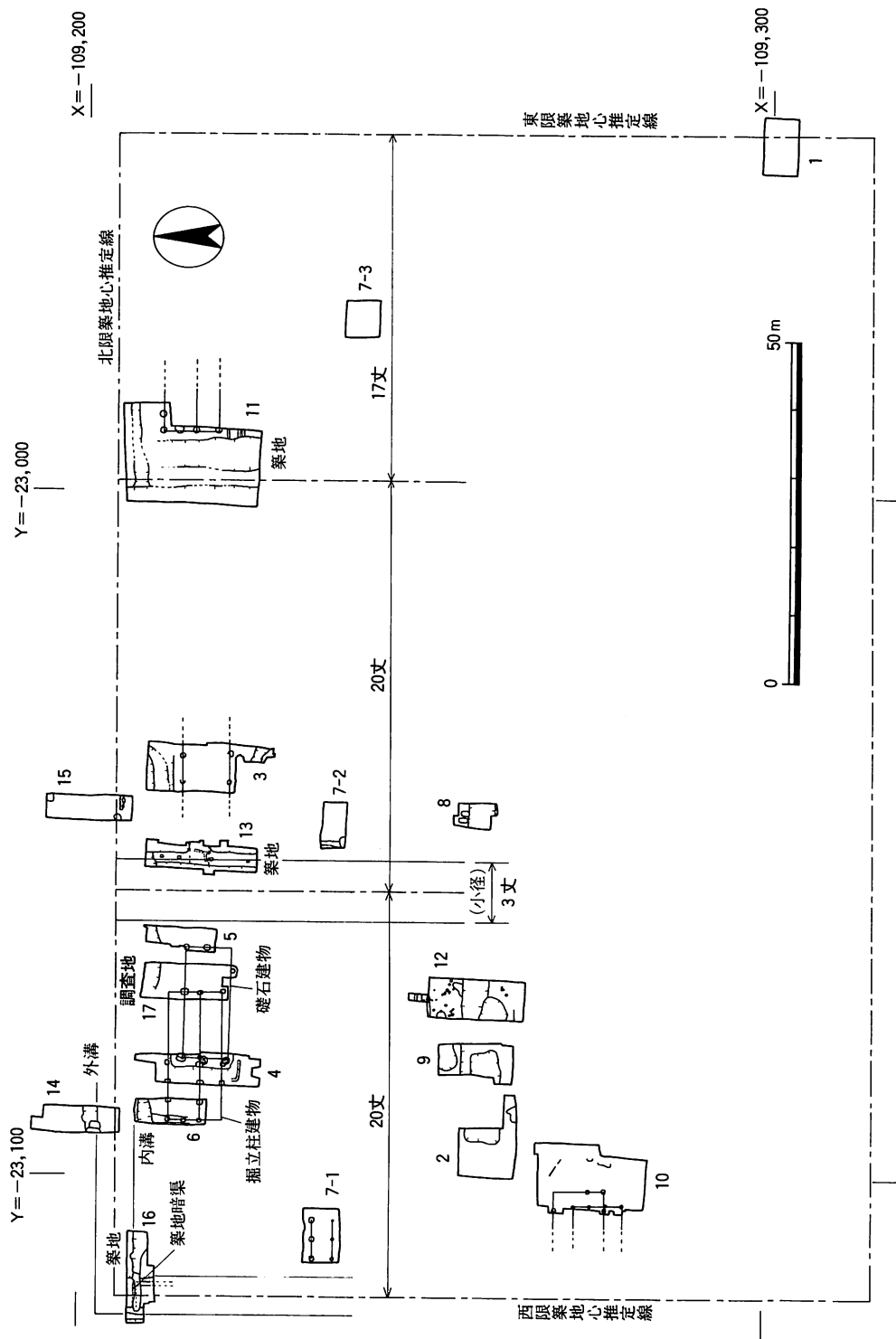


图 9 中務省跡主要遺構位置図

表1 中務省跡発掘調査一覧

番号	調査年度	主 要 遺 構	主 要 遺 物	備 考
1	1964		軒瓦	注1
2	1978	土壌	一括土器	注2
3	1978	北限築地内溝 東西棟建物	軒瓦	注2
4	1979	北限築地内溝 東西棟掘立柱建物 東西棟礎石建物	軒瓦	注3
5	1980	北限築地内溝 東西棟礎石建物 古墳時代後期土壌	墨書土器「内舎人」	(財)京都市埋蔵文化財研究所調査
6	1980	北限築地内溝 東西棟掘立柱建物 南北溝	緑釉陶器火舎 墨書土器「□□省」 軒瓦	注4
7	1981	掘立柱建物 南北溝、瓦溜 古墳時代後期竪穴住居		(財)京都市埋蔵文化財研究所調査
8	1982	東西溝、土壌	軒瓦	注5
9	1986	東西溝、南北溝、土壌	軒瓦	注6
10	1989	掘立柱建物2棟 瓦溜	緑釉陶器火舎 軒瓦	注7
11	1989	北限築地内溝 南北築地・溝、瓦溜 東西棟掘立柱建物	緑釉陶器火舎 軒瓦、墨書土器	(財)京都市埋蔵文化財研究所調査
12	1989	東西溝、土壌	大量の瓦類、軒瓦 鷗尾	注7
13	1990	北限築地内溝 南北築地・溝、通路、暗渠	軒瓦	注8
14	1991	北限築地外溝(側溝) 礫敷路面(中御門大路)	軒瓦	注9
15	1991	北限築地 礫敷路面(中御門大路)	軒瓦	注9
16	1991	北限・西限築地、内溝 塙組暗渠、西限外溝	軒瓦	注9
17	1992	北限築地内溝 東西棟掘立柱建物 東西棟礎石建物	墨書土器「監」 軒瓦	当報告書

建物を1棟ではあるが、規模を確定することができたことである。身舎が2間×7間の東西棟で、南に廂が付く掘立柱建物に復原できた。以上、今回の調査の主な成果を述べたが、これによって中務省内の建物の変遷の一端を明らかにすることができた。

注1 「平安宮跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1964）』京都府教育委員会 1964

注2 「平安宮中務省跡」・「平安宮陰陽寮跡」『平安京跡発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979

注3 「平安宮中務省跡」『1979年度 平安京跡発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980

注4 「平安宮中務省跡」『昭和55年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981

注5 「平安宮中務省跡」『昭和57年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983

注6 「平安宮中務省」『昭和61年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987

注7 「平安宮中務省（1）」・「平安宮中務省（2）」『平成元年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990

注8 「平安宮中務省」『平成2年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991

注9 「平安宮中務省（1）」・「平安宮中務省（2）」・「平安宮中務省（3）」『平成3年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992

注10 「平安宮太政官（2）」『昭和63年度 平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989

注11 陽明文庫蔵 宮城図